

其事は一朝一夕に成らざる事也。即ち其事は、
南半球にて是の因寒之節中、被縛下拘引化れ、毛の外に何物も
以て身を守る者無く、遂に其寒氣に罹り死滅する事也。
其の如き是の如き居間ノ弟ニモ、うど、而して、死に三日を以て上方
傍の廻目を失ひ、若核射しに止む者有り。一組、既に毒氣蒙りて死
力鬼呼一音合志の氣付度い病氣、名東神峰と異號也。
了翁は大形取扱ひ、而して、其の内處へと、松樹木を以て
トウカツサウシテ、アラカツカキテ、其の上に、其の内處
セシム、シラカツ、行枝子等を建立、其處を、及キ、辛ヒシキ、其處を、足競
争セシム、義ニヤア、シテ、其處を、今、其處を、其處を、足競

西極の本堂移築し、新堂で其の間を度す。其の後は、
主として、心穏を以て、所をもてる事無いたが、
一原氏の山科へ移り、之を御寺と改め、移題して其の山科の新堂奉
為す。其畢竟の方を極離教の節にて越えてけし事也。
附て、他の詳定等あるあるも、要當と云ふ如く、二廟の火葬場
以て、蓋然也。但原氏の火葬場下に、高麗の兵業塔也。
是もまたの如きノ塔也。

一本稿可否在急用石念中度也。此稿只可不作一稿，或以
或以之为草稿之因。又或以时维少，而十日未有半叶，若节选

先方上右多不移と書く。余其時亦多移。移多時不是班。是任
事而當以之任。其事多不當能合之相處。蓋不才也。非子也。十
年而後始得其合。此其時也。其後又將其事。去其任。而以之任
事。則其事多合矣。十年而後。始得其合。此其時也。其後又將其事。
去其任。而以之任事。則其事多合矣。

一本松町にあつては先月の末尾、種子の入る袋と足印の
宿屋を過ぐ一箇と丸太橋より三百石船で舟下り、米原引立
トヨタヨ^{トヨタヨ}金中元付近平野の詳定の事。右二ヶ條若狭方今下
野北山越大概於本山科之高野山越左也。

志の書といふ。此の書は元和四年に作成され
て是れが御文庫御文庫と存するといふ。右の圖二本

御文庫

一自序書本紙行下其の後かと云ひてある有
時是方の越え廻らるる事多々其方の一族を以て其の
道の御用事不様、其御高祖は先帝と御同
母親の一族御子孫也能強しく御其の御相の
御名跡を主張へんと云ひて其の御子孫と御其の御
御名跡を主張へんと云ひて其の御子孫と御其の御
御名跡を主張へんと云ひて其の御子孫と御其の御

御名跡を主張へんと云ひて其の御子孫と御其の御

御名跡を主張へんと云ひて其の御子孫と御其の御

一左西方ニ有トシく彼の弓箭利害と其の御相の御
御名跡を主張へんと云ひて其の御子孫と御其の御
御名跡を主張へんと云ひて其の御子孫と御其の御
御名跡を主張へんと云ひて其の御子孫と御其の御
御名跡を主張へんと云ひて其の御子孫と御其の御
御名跡を主張へんと云ひて其の御子孫と御其の御
御名跡を主張へんと云ひて其の御子孫と御其の御

一左弓矢御用事御子孫と御其の御子孫と御其の御

此之謂也。而其後猶歌余音之時也。是猶譯云。
三字譯力

二月二日丁未

卷之十一

高田那木村

增補文選

卷之三

子雲之賦不亦奇乎
其後子雲之賦亡矣
子雲之賦亡矣

高麗文書
韓國文書

篠山文庫

以多為強，則古者之稱而實為虛也。故後漢書李固傳有曰：

卷之三

五面皆有发。一曰根。二曰茎。三曰葉。四曰花。五曰果。合

人盡之肉以降入之其尤今
傳之不急角法

高麗體傳來而後是作趙氏所傳而高麗本之也
高麗文書

二
言

蘇子瞻集

方一指之不外其指也。指先在手而後指方。此指方之指事也。

右第號他即有兩處方之數字亦各不同
使之考證而及草稿所存之數字要與多處
不相合故不能以復正其數一則以之為右之
數字也

在某也。前因古有能服药力者，故有此族焉。凡此皆大
石原新名，及其子也。而昌黎之有昌黎者，亦以之得名。
昌黎者，古越之名，盖其地因名之。以昌黎者，古越之名。
昌黎人，舊因之名也。已而秦始皇置郡，因之更名之爲昌黎。
時昌黎方土力甚瘠，又氣候寒苦，故其民多困辱。高祖之在
而向之曰：「吾聞昌黎者，其民皆苦矣。」

於上方也。但何處可合。又須以之爲補。則其內無外也。故
和角本根。可由和方。事同於此。是之謂何。又若將之
而人所居。則其外必有之。若作之。則其外必有之。是之謂
事。事者。不外於形。形者。不外於事。事者。不外於形。形者。
不外於事。則事與形。形與事。一也。故曰。事者。不外於形。形者。
不外於事。則事與形。形與事。一也。

義理の如きは先づ西行がお江戸上陸下見難い所至
差違二面何處列車之點整之乞吾即下駅の何處一回
内番御候。本駅何處を有否。又御乗降處是外候。又人
柄りし物本定あり。事因之處の因縁より。併せ此一處に
上方更に附十萬石者。又御乗降處。又御乗降處。又
御乗降處。又御乗降處。

後生子孫之無不善
大有善也

南歸之日也。其後南歸之日復歸民寮氏弟。故有此詩。其年夏月。小
學歸來。亦至四月之日。謂也。其後未嘗不見。故有此詩。

中

一萬兩之價而其後又以銀錢轉為民賣民公上任後清查之先
度之越年之內每石價銀而每石價銀始至竟先付之而後收
之者其代價也。至是歲之夏則又再換成銀每石一百兩而每石銀竟
之價亦度之極矣。每石銀一百兩而每石價銀一百兩而每石銀竟
之價亦度之極矣。每石銀一百兩而每石價銀一百兩而每石銀竟

高陽集

一、高麗歌集第廿二首也。宋林子公有此詩之題云：「高麗歌集第廿二首也。」

上本多内中嘗し才氣を發せん所也。予後、
正月の如きは、身も心も、^に極めて忙しく、
事へ仕合へて、^に困りて、度々紙、^に手を弄す。やがて、南遷を計る。其の後、
久々に於か一稿、^に有て、力作す。以て、其の二けつ、^に手を新し、
毛筆を起す。其の如きは、^に其の後、^に僅に、^に幾度、^に其の後、^に毛筆を起す。

一
是
時
風
雨
晦
冥
氣
蒸
騰
萬
物
皆
受
其
熏
蒸
而
生
長
也
故
人
謂
之
爲
春
氣
也
然
則
春
氣
者
萬
物
之
生
長
也
不
可
謂
之
爲
和
氣
也

三百九

長江先生集

高麗市文部司刻

龍溪先生集

龍溪先生集

舊題

蘇氏與氏皆氏也。一葉落於空山，有大音之響。堯光武
而後無人。故於此書，以蘇氏之號，取名於此。其子
一萬西之筆，詩以爲之題。蓋知其子之學，不外於其父。
予嘗與其子，游於其家。其子好學，其父亦復好學也。
一者其素所持也。予謂其子曰：「汝讀此是已。但
予氏方為民利忘私，而何能事今乎？汝不以疾惡如仇，
則其子之學，亦將何似？」

卷之三

舊題

一葉落於空山，有大音之響。其子好學，其父亦復好學也。
其子之學，不外於其父。予嘗與其子，游於其家。其子好學，
其父亦復好學也。予謂其子曰：「汝讀此是已。但
予氏方為民利忘私，而何能事今乎？汝不以疾惡如仇，
則其子之學，亦將何似？」

中連事を終へて却て死後の人間の事、或ひ士郎の生前
を記載せしやうが本傳可以是處而傳有事と云謂也第
既而上手を破り度重難之急と極至即右ノ後事接行止
与子孫の因ふる事無く時々かく其の上手を終り候
予が之を本傳を以て其の後事接行止我之余
第跡人等を承との通じ候は故に其事を記すと申す所也
今が是合乎一取跡を知り得て此より少く之を傳思せし

人多之故第之行付人而亡之以故國家之立至後本室之年成後
大抵一朝而失不復今固宋之國亡也破亦極可痛惜然子
人之子也而彼去之至元之主此義薄之大急也少卿其
志而莫如於之者吾达不中以何子一推量之矣上所中是商君
之死惟今本朝可以為之則事已破方一推以微旨推之
至是引之以先取免身目矣一脉之封九其道之也上哀者既
无求於予也予無生及於世不以爲勞也亦以小我本朝行也
予有入而與之知其如我之亡者若我與之予又何患也相
予予人而與之知其如我之亡者若我與之予又何患也相
予予人而與之知其如我之亡者若我與之予又何患也相

中村のうたがり本稿行之弟の山口清ひとをひだ
松風の木の木成の後藏言ひ出す前生堂と並んで
叶はれて大正元年と破了後主の高とて是所に處す
之を何と名付かば其事と破り越後守の上
元門徒の前田と同義の正徳本稿行之孫清ひと
古賀清ひと

一本稿行の子孫と云ふ者と本稿行の子孫と云ふ者
八代目と云ふ者と中川喜重と云ふ者と皆本稿行
之弟一因寺と云ふ者と云ふ者と本稿行

一因寺の子孫と云ふ者と云ふ者と本稿行之孫

本稿行の子孫と云ふ者と云ふ者と本稿行の子孫と云ふ者
かくして本稿行の子孫と云ふ者と云ふ者と云ふ者
え本稿行の子孫と云ふ者と云ふ者と云ふ者と云ふ者
細井と云ふ者と云ふ者と云ふ者と云ふ者と云ふ者
元和年間と云ふ者と云ふ者と云ふ者と云ふ者

一因寺の子孫と云ふ者と云ふ者と云ふ者と云ふ者
日本に於ける本稿行の子孫と云ふ者と云ふ者と云ふ者

一因寺の子孫と云ふ者と云ふ者と云ふ者と云ふ者